

平和学習における「キッズゲルニカ・プロジェクト」の実践報告

狩谷潤也*

抄録 2021年度に実施したSTEAM Labの活動と関連した社会貢献活動の報告である。実施内容は小学校の教員と連携した平和教育の一環としての「キッズゲルニカ・プロジェクト」の実践である。総合的な学習の時間と国語科や図画工作科とも関連させ、教科横断的に取り組むことで、「自分にとっての平和」を追究する学びを提案し、効果的な教員研修にも寄与する社会貢献活動でもある。

キーワード 平和学習, 教科横断型学習, キッズゲルニカ・プロジェクト, 社会貢献活動

1. はじめに

1995年から始まったKids'Guernica キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクトは、「子どもによる絵画制作」を通して平和のメッセージを描くという国際的なアート・プロジェクトである。パブロ・ピカソが、1937年に制作した「ゲルニカ」と同じサイズ(3.5m×7.8m)の絵に、子どもたちが平和のメッセージを込めて、描くというもので、国内外で多数制作されてきた。水口(2011)は、国内外でのワークショップを実施する活動を通して、異文化理解と美術教育の可能性を探ってきた。しかしながら、近年のコロナ禍の中では、直接的に他校や学校外の施設などと交流することは難しい。また、特に小学校の高学年では、外国語科やプログラミング教育の必修化などの負担が増加し、新しい取り組みを実施する余裕がなくなっている実態がある。

同様に、各教科の研究に関する取り組みについても、研究発表や授業研究の機会が減少している。特に、都市部では、経験の少ない教員が数多く配置され、教育実践力の低下が危惧されている。

そこで、現職経験のある大学教員が、現場の教員と連携して授業実践を行うことで、「プロジェクト型の授業実践」の提案や、授業を通して子どもへの指導のポイント示すことができ、伝達型の研修よりも大きな効果があると期待した。

2. 実践の概要

2.1 実践の計画

本実践は、対象学級の担任教諭が「キッズゲルニカ」に取り組みたいという強い思いを持ち、学年団や筆者と

協働して取り組んだものである。

時期：2021年10月～12月

指導者：筆者、学級担任、特別支援学級担任

対象：大阪市立三軒家西小学校6年生(在籍15名)

実施計画：全14時間

第1次 平和について考えよう(2時間)

第2次 キッズゲルニカで伝えよう(10時間)

第3次 自分にとっての平和を考えよう(2時間)

2.2 授業の実際

第1次では、子どもたちが今まで学んできた平和について交流した。10月の時点では、国語科の「ヒロシマのうた」や総合的な学習の時間を通して、戦争や原子爆弾の恐ろしさについて学んでいた。社会科では未習であったが、実践を行った時期に学ぶようになっていた。

子どもたちに意識させたことは「『自分にとっての平和』とはどういうことか」ということである。実践期間中には、広島への修学旅行が計画されており、「自分ごと」としての「平和」について考え、表現することが重要だと考えたためである。

子どもたちは、平和についてそれぞれイメージを持ち、多くは現在のコロナ禍と関連させて考えていた。その中で、平和はそれ自体が当たり前の状況では感じる事が難しく、「平和を実感するには、困難な状況を経験することが必要」だという認識が共有された。

また、キッズゲルニカ・プロジェクトのもとになったピカソの「ゲルニカ」を紹介し、制作の経緯や作者の思いにも触れることができるようにした。ゲルニカのコピー資料(図1)を鑑賞する中で、子どもたちは、ゲルニカに描かれた人々の苦しみや悲しみをディフォルメして表現していることや、牛や馬などの動物も人間の戦争で苦しんでいることにも気が付いた。

*教育学部教育学科



(図1)

アートマイルジャパン (<http://artmile.jp/>) のサイトからは、世界中でキッズゲルニカの取り組みが行われていることを知り、各自のタブレットで調べてくるように指導した。また、広島での修学旅行で学んだことを表現できるように次時の課題設定を行った。

第2次では、制作に際して、共同作品ではあるが、自分の表したいことを表現できるようにすることが大切だと考えた。まずは、黒板に自分たちのイメージをどんどん描いていき、付け加えたり修正したりしながら、画用紙に下描きをつくった。次に、ロール紙をつなぎ合わせて制作する用紙を作成し、下描きを分割したものをもとに制作を進めた(図2)。本実践では、子どもたちの人数や指導時数を考慮し、ゲルニカの大きさの約75%(2.6m×5.8m)とした。



(図2)

制作を始めると、下描きを拡大して描くようになるため、実際には空白が大きくなる。子どもたちは、描かれたものから発想し、さらに描きたいことを思い付くようにして、制作を行っていった。

展示場所である体育館に移動し、彩色をしていく場合でも、下描きに固執することなく、思い付いたことを試しながら表現できるように支援した(図3)。

指導の際には、描いた絵を俯瞰して鑑賞し、奥行き(前後関係)やバランス(大きさの違いや色の組み合わせ)などを、具体的に意識できるようにした。



(図3)

子どもたちにとって、修学旅行で経験したことは、やはり印象的であったようで、千羽鶴や原爆ドーム、新幹線や宮島のシカなどが象徴的に描かれている。また、自分たちの顔や、修学旅行の引率教員が中心に描かれていて、それぞれの思いが表現されているように感じた(図4)。



(図4)

第3次では、作品展で展示した自分たちの作品を、筆者や担任教員、学年団教員と一緒に鑑賞した。子どもたちは、作品の大きさを実感したり、自分が特にこだわって表現した部分を指さしたりしながら達成感を感じていたようであった(図5)。



(図5)

2.3 実践のまとめ

本実践では、子どもたちによりよい実践を提案することに加え、現場の教員のニーズにどのように応えるかというねらいがあった。

今まであまり実践したことのない取り組みには、教員も子どもも不安が大きいものである。そのためには、導入時から、見通しを持って学べるような支援や教員間での共通理解が大切である。

作品が完成に近づくにつれ、教員の「すごい!」「こんなんできるんや!」といった感心した声が聞かれたこ

とも成果であると考える。

3. おわりに

本実践では、現場の教員のニーズに、大学教員がどのように応え、社会貢献を行うかについて提案した。

教育現場の多くは、日々課題に追われ余裕のない状態である。子どもの成長を実感し、自らの実践に手ごたえを感じながら指導する経験を積み重ねることで、教員が前向きに取り組み、実践力を高めていくことが期待できる。

今後も、より効果的な教員研修や実践提案ができるかを考え、社会貢献に取り組みたい。

引用・参考文献等

- 1) 水口 薫：「キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクト：異文化理解と美術教育の可能性」、(大手前大学論集)、(2011)。
- 2) アートマイルジャパン <http://artmile.jp/>
- 3) 南田辺小キッズゲルニカ 自分にとって平和とは～僕たち私たちの平和～」 https://www.nichibun-g.co.jp/data/case-study/cs_zuko/cs_zuko020/

(2022年3月2日 受理)